第７課　マタイによる福音書24章と25章

【暗唱聖句】

「偽メシアや偽預言者が現れて、大きなしるしや不思議な業を行い、できれば、選ばれた人たちをも惑わそうとするからである」マタイ24:24

【今週のテーマ】

今週はマタイ24～25章から終末時代の備えについて学びます。

【日曜日・預言の力強い確信】

「そこで、イエスは言われた。「これらすべての物を見ないのか。はっきり言っておく。一つの石もここで崩されずに他の石の上に残ることはない。」マタイ24:2

イエス様は荘厳な神殿を見て、やがて崩壊することを予告します。神殿崩壊の予告を耳にして弟子たちはそれを世の終わりと結び付けました。神殿が崩壊するほどの出来事を想像したとき、それは世の終わりの日に違ない、それくらいあり得ない出来事と思えたのでしょう。そこで弟子たちはイエス様に尋ねます。

「おっしゃってください。そのことはいつ起こるのですか。また、あなたが来られて世の終わるときには、どんな徴があるのですか」（マタイ24:3）

この弟子たちの質問に対してイエス様が答えられた内容は、驚くべき破壊と混乱の連続でありました。しかも、それは現代に直結するものでした。しかし、何よりもまずイエス様が語られたのは惑わしに気をつけよということでした。

「人に惑わされないように気をつけなさい。わたしの名を名乗る者が大勢現れ、『わたしがメシアだ』と言って、多くの人を惑わすだろう」マタイ24:4

なぜ、惑わしに気を付けることをイエス様は最初に語られたのでしょうか。これは魂の救いに直結していることだからです。戦争も迫害は信仰心を強めることになるでしょう。しかし、惑わしはその逆です。しかも、最後のときなのですから、回心のチャンスが無くなる中で惑わしが起こるのです。

【月曜日・最後まで耐え忍ぶ】

「そのとき、あなたがたは苦しみを受け、殺される。また、わたしの名のために、あなたがたはあらゆる民に憎まれる」マタイ24:9

終末時代になると、多くの苦しみを受けることになります。キリストはわたしの名のゆえに憎まれ、殺されるものもあると言われました。このような出来事がどのような形で現実化されていくのでしょうか。かつて日本では2度の迫害の時代がありました。1度目は江戸時代であり、2度目は戦時中でした。江戸時代の迫害は世界でも類を見ないほどの激しいものでした。現代は宗教の自由が保障されているので、同じような迫害が起こるのだろうかという疑問もあることでしょう。このキリストの日本における預言は、江戸時代や戦時中に受けた弾圧をも含んでいると考えられますが、この先には黙示録に描かれた預言との絡みの中で現実化されていくだろうと思われます。

「わたしはまた、もう一匹の獣が地中から上って来るのを見た。この獣は、小羊の角に似た二本の角があって、竜のようにものを言っていた。13:12 この獣は、先の獣が持っていたすべての権力をその獣の前で振るい、地とそこに住む人々に、致命的な傷が治ったあの先の獣を拝ませた。13:13 そして、大きなしるしを行って、人々の前で天から地上へ火を降らせた。13:14 更に、先の獣の前で行うことを許されたしるしによって、地上に住む人々を惑わせ、また、剣で傷を負ったがなお生きている先の獣の像を造るように、地上に住む人に命じた。13:15 第二の獣は、獣の像に息を吹き込むことを許されて、獣の像がものを言うことさえできるようにし、獣の像を拝もうとしない者があれば、皆殺しにさせた。13:16 また、小さな者にも大きな者にも、富める者にも貧しい者にも、自由な身分の者にも奴隷にも、すべての者にその右手か額に刻印を押させた。13:17 そこで、この刻印のある者でなければ、物を買うことも、売ることもできないようになった。この刻印とはあの獣の名、あるいはその名の数字である」黙示録13:11~17

この地中から上がってきた獣とはアメリカのことを指すと考えられます。先の獣とはローマ方法のことですが、両者が一つとなって力を発揮していくことが預言されています。注意すべき言葉は「しるしによって地上に住む人々を惑わせ」ること。「獣の像を造り、それを拝もうとしない者を皆殺しにさせ」ること。そして、「獣の印を押させ、印がない者は物の売り買いができない」ことなどです。アメリカに逆らう国は、生きていくことができないほど圧倒的なパワーを持っています。それが軍事力、経済力だけでなく、やがて霊的な暗黒の力も身に着け偽りの礼拝を強要してくるようになります。このようなことが何らかの形で日本にも影響を与えてくると思われます。

＊「子羊のような角」との表現からピューリタンの国として始まったことを表していますが、竜のようにものを言います。この獣は天から火を降らせるとありますが、核爆弾を投下した唯一の国です。

＊右手や額に印が押されるとありますが、いまアメリカでは手の甲や脳にマイクロチップを埋め込む管理する始まっています。

「しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われる」マタイ24:13

キリストが教えられたのは、そのような状況の中で求められるのは、最後まで耐え忍ぶことです。ではどのような人が最後まで耐え忍ぶことができるのでしょうか。エレン・G・ホワイトの言葉を引用しましょう。

「聖書の真理によって心を堅固にした人たち以外には、誰も最後の大争闘に耐え抜くことはできない」各時代の大争闘下P359

急に備えることはできません。聖書の真理を軽んじてはいないか吟味し、反省し、真理に固く立つことを大切にしている人たちが、最後の大争闘にも耐え抜くことができます。

「そこで、わたしのこれらの言葉を聞いて行う者は皆、岩の上に自分の家を建てた賢い人に似ている」マタイ7:24

み言葉を学び、それを実行することこそ真理に固く立つことであり、そのとき岩の上に家を建てたもののように、試練が襲ってきても耐えることができます。岩とはキリストの象徴ですから、み言葉を学び、それを実行するうちに、キリストを土台とした人生を築き上げていくことができるようになるのです。

【火曜日・憎むべき破壊者】

「預言者ダニエルの言った憎むべき破壊者が、聖なる場所に立つのを見たら―読者は悟れ―」マタイ24:15

イエスのキリストの終末預言は、エルサレムの滅亡についても同時に預言していました。その際にしるしとなるのが、「預言者ダニエルの言った憎むべき破壊者が、聖なる場所に立つ」ことでした。ダニエル書には次のように書かれてあります。

「日ごとの供え物が廃止され、憎むべき荒廃をもたらすものが立てられてから、千二百九十日が定められている」ダニエル12:11

憎むべき破壊者とは何でしょうか。並行記事を見ると、ルカ21:20では「エルサレムが軍隊に囲まれるのを見たら、その滅亡が近づいたことを悟りなさい」となっており、ダニエル書でも11:31で「彼は軍隊を派遣して、砦すなわち聖所を汚し、日ごとの供え物を廃止し、憎むべき荒廃をもたらすものを立てる」書かれてあり、それが一つは軍隊であることがわかります。つまりティトゥス将軍に引き入れられたローマ軍です。彼はオリーブ山に一度立ち、エルサレムを包囲した後、いったん撤退し、再び襲ってきてエルサレムの町々や神殿が崩壊したのでした。しかし同時に、ダニエルが語った預言には霊的なメッセージも含まれていました。それは「憎むべき破壊者が日ごとの供え物が廃止しようとする」、すなわちキリストの十字架の働きを無きものとしよう企もうとするということでした。これはローマ帝国から生まれたローマ法王制による救済と執り成しの代替制度によって、天でのキリストの執り成しを業を侵害することを預言したものです。以下のダニエル書8:9～12までの預言は小さな角としてあらわされるローマ法王制が横方向（地上）と縦方向（天上）の両方に手を伸ばそうとすることがわかります。

「そのうちの一本からもう一本の小さな角が生え出て、非常に強大になり、南へ、東へ、更にあの「麗しの地」へと力を伸ばした。8:10 これは天の万軍に及ぶまで力を伸ばし、その万軍、つまり星のうちの幾つかを地に投げ落とし、踏みにじった。8:11 その上、天の万軍の長にまで力を伸ばし、日ごとの供え物を廃し、その聖所を倒した。8:12 また、天の万軍を供え物と共に打ち倒して罪をはびこらせ、真理を地になげうち、思うままにふるまった」ダニエル書8:9～12

【水曜日：十人のおとめ】

イエス・キリストが世の終わりの預言を語った後、たとえ話を用いて世の終わりに際してのいかに準備すべきかについて教えられます。最初のたとえ話は「10人のおとめ」です。彼女たちは花婿であるキリストのご再臨を待っているクリスチャンたちでした。しかし、彼女たちは全員キリストが遅いために眠り込んでしまいました。世の終わりには目を覚ましているようにと何度も警告されていることを考えると、全員が眠り込んでしまうとはどういうことだろうと思わされます。すると、キリストが来られます。この時に、5人のおとめたちは「ともし火と一緒に壺に油」を用意していましたが、残りの5人は油を用意していませんでした。キリストが来られるまでは両者の違いはわかりませんでした。しかし、来られたときに両者の違いがはっきりしました。それは油を用意しているかいないかでした。油は聖霊を表し、それはキリストとの日々の関係を表していました。だから、油を切らしてしまったおとめに対して、キリストはあなたがたを知らないと言われたのです。これはわたしと何の関係もないという意味です。そして、このような状態こそが霊的な眠りなのです。

【木曜日：あなたのタラントンを用いる】

イエス・キリストは二つ目のたとえ話として、再臨前のクリスチャンたちに大切なのは、預けられたタラントをしっかり用いて生きることでした。自分勝手に生きるのではありません。与えられた能力に従い、それを用いながら生きることです。能力を用いるとその能力は増えていきます。つまり成長します。クリスチャンは天に帰還するまで、いかに成長するかが求められているわけです。そして、成長しているその姿を主がご覧になって、『忠実な良い僕だ。よくやった。お前は少しのものに忠実であったから、多くのものを管理させよう。主人と一緒に喜んでくれ。』と言われるのです。